



附属小のマスコット・キャラクターが決まりました！平和で一人一人が輝く学校という願いが込められています！

令和5年度 附属小学校だより

スマイル³ふぞく



第6号 令和5年10月31日（火） 校長 古野 祐一

全国給食甲子園で12代表に選出！

今回は大変嬉しい報告をさせていただきます。本校の山崎栄養教諭が考え提供していた本校の給食メニュー「長崎伝統野菜給食」が、第18回全国学校給食甲子園で第四次審査を通過しました。全国応募総数1,079校から12代表しか選ばれない90倍の難関を突破しました。実は一昨年の応募で、第三次審査まで通過し、全国23代表に選ばれ、第四次審査で落選。その雪辱を見事に果たし、決勝大会への出場切符を手にしたのです。12月9日（土）～10日（日）の決勝は、東京の女子栄養大学・駒込キャンパスにて、山崎栄養教諭と給食調理員の川元リーダーがペアを組んで実際に調理する「調理コンテスト」が実施されます。昨年の決勝大会は、YouTubeで「給食甲子園」と検索すれば閲覧できますので、その迫力をぜひ御覧ください。以下は12代表に選出された際の審査員講評です。



給食を豊かに開発している山崎栄養教諭。



給食調理員リーダーの川元さん。

【12代表に選ばれた際の審査員講評】

長崎県に伝わる伝統野菜をふんだんに取り入れた献立であり、「まるごと長崎県給食」として校内外への積極的広報活動も評価する。彩りがよく統一感を感じる美しい盛り付けを評価する。食の指導においても実物を見せるなど工夫が見られ、日常の食育指導の様子がうかがえる。生産者が減っている伝統野菜を給食で使うことで傳承していきたいという意図がしっかりとしており、職の文化、郷土料理を守ろうとする思いが伝わってくる。



「長崎伝統野菜給食」の献立写真。

本校職員は長崎県の教育に貢献するという使命・役割があります。授業・学級づくりに加え、食育教育についても要請が増えました。「食べることは生きること」という信条で、子供の人生を食で豊かにしたいと願う山崎栄養教諭の地道な努力が、附属小のみならず県下に波及していくことを喜んでいきます。決勝大会の結果は後日お知らせいたします。

「北斗の丘」環境整備の御礼！

北斗の丘再生プロジェクトの一環で始まった環境整備も3年目を迎えました。10月20日（金）に保健体育部の皆様の御尽力のもと、多数の保護者の方々が参加をいただき、みちがえるほどに美しい北斗の丘にいただきました。この後、緑色の滑り台の奥にターザンロープを設置する準備を進めております。北斗の丘が、忘れられない思い出を育む場所になっていくことが嬉しいです。



懸命に除草作業をしてくださった皆様。

※裏面に続きます！

北斗の感動

地域の方から嬉しいお電話をいただきました。

5歳の子と赤ちゃんを連れてバスに乗っていました。附属小の女の子が「席をどうぞ」と声を掛けてくれました。同時に別の方が譲ってくれたので、一度お断りをし、その後、再度「席をどうぞ」と声を掛けてくれて、家族全員座ることができました。きっと勇気を出して譲ってくれたのだと思います。同じバスに乗っていた他の子も大変バスマナーが良く、気持ちよく乗ることができました。大変嬉しく、連絡させていただきました。

翌日、給食時間の放送で、このことを伝えると各教室から拍手が聞こえてきました。仲間への敬意が自然と拍手という形で表れたのでしょう。

このような子どもの姿に、私自身よさを感じるのは、これまで大切にしてきた思いがあるからです。

私には、どの学年になっても、学級を育てる経営の柱がありました。

仲間の喜びを 自分の喜びに

それは、「仲間の喜びを自分の喜びにする」子どもたちが育つということです。

仲間の頑張りを自分のことのように喜ぶ。仲間の成長を刺激に、今度は自分もと、自らのエネルギーに変えることができる。私の願いです。この柱は、教頭になった今も変わりません。

本校の教職員も、子どもへの願いを抱き、今在る子どもの姿に目を凝らし、保護者の方の思いに耳を傾け、具体的な方針を立て、創意工夫しています。子どもと共に成長することに、日々やり甲斐を感じています。だからこそ、子どもの小さな変化や成長が何よりもエネルギーとなり、自分ごとのように喜べるのです。

「中休みに、空中逆上がりができたよ。」と嬉しそうに伝えに来てくれた5年生の女の子。話を聞いていると、どうも自分の事ではなく、友達のことのようです。そんな子どもが北斗の学舎にいらることが私の喜びです。 **教頭 橋田 晶拓**

未来で輝く北斗の子

多様な他者とのコミュニティの中で

今からおおよそ35年前、私が幼稚園児だった頃の話です。保護者参観日の授業で、親の似顔絵を描いてプレゼントするという活動がありました。

当時の私は、藤子不二雄「オバケのQ太郎」に夢中だったので、母親の髪の毛を3本にして作品を描き上げたのです。そして…こっぴどく叱られました。



「藤子・F・不二雄大全集」より
<https://www.shogakukan.co.jp>

当時の私には、悪いことをしたという意識はまったくなく、むしろ「こうしたほうが面白い」という判断で作品作りを行いました。しかし、自他共に望ましくない結末を迎えたのです。では、当時の私に足りなかったのは何でしょうか。それは、「判断基準」です。自分にとっては面白いと思っていることが、人にとってはそうではなかった。このようなことは、小学生の中でも度々起こり、時にはトラブルに発展することもあります。

近年では、動画投稿サイトにおいて、投稿主が面白いと思って投稿した不適切なはずら動画が炎上するなど、大人の社会でも問題となっています。社会のコミュニティの中で北斗の子が活躍するための下地として、この判断基準をしっかりと考えることができるよう全職員で関わっているところです。

主幹教諭 才木 崇史

教えから学びへ

即興的対応

先日行われた学校公開では、第6学年算数科の学習で製作した、学校案内用の地図や模型等を展示しておりました。御覧いただけでしょうか。



従来、学校での学びというのは、「学ぶこと(教科の内容)が先に決まっており、それに子どもたちが合わせる」という構造になっていました。そこから視点を変え、「子どもたちが『～したい』ことに合わせて、学び(教科の内容)を決める、使う」という学習を展開しています。これにより、教科等がもつ価値の実感が可能になると考えたからです。

まずは、従来通りの方法で、基本的な「比」「拡大」「縮小」等の知識や技能を身に付けていきます。その後、その学びを生かして、どんなことに取り組みたいかを考えていきます。その取組の過程で、子どもたちが抱いた必要感や困り感を、教科等の力を応用しながら、次のように解決していきました。

校舎の長さは実測しないといけないの？ → 「縮尺」を用いた測定

校舎の高さは、どのようにして測ることができるの？ → 「校舎を撮った写真の「比」を利用して測ることができるの？」 → 「三角形の縮図」の利用

子どもの豊かな学びを促進していくため、全職員、子どもの「～したい」と教科等をつなげる教師の専門性を磨き続けていきます。 **教務主任 松尾 勇哉**